

優しい彼氏がいるのに、

路地裏で知らない男に

堕ちた夜

——優しさでは満たされない、

誰にも言えない裏切りの記録——

著：Pon



優しい彼氏がいるのに、路地裏で知らない男に堕ちた夜

―優しさでは満たされない、誰にも言えない裏切りの記録―

まっすぐ帰るつもりだった。

仕事帰りの駅前には、いつも通り人で溢れていた。

改札から吐き出される人の波。

商店街の明かり。

焼き鳥屋の煙。

どこかの店先から流れてくる、聞き覚えのない流行りの曲。

何も特別な夜ではなかった。

バッグの中には、帰りに買った小さな紙袋が入っている。
コンビニで買ったチョコと、明日の朝に食べるつमりのパン。
それから、彼の家に寄るなら一緒に飲もうと思って買った、甘い
カフェオレ。

本当に、まっすぐ帰るつもりだった。

けれど、商店街を歩いていると、ふと視線が横へ流れる。

背の高い男が、店の前で誰かを待っていた。

黒いジャケットの肩幅が広くて、片手でスマホを持つ指が長い。

顔をじっと見たわけではない。

名前も知らない。

声も知らない。

それなのに、目が離れるまでに少しだけ時間がかかった。

すれ違ったあとで、自分が振り返りかけていたことに気づく。

慌てて前を向いた。

別に、何かを期待したわけじゃない。

ただ、背が高いなと思っただけ。

手が大きいなと思っただけ。

あの腕に引き寄せられたら、どんな感じがするのだろうか、ほんの一瞬、考えてしまっただけ。

ほんの一瞬。

そう言い聞かせるように、わたしは足を速めた。

信号が青に変わる。

横断歩道を渡る人たちの靴音が、ばらばらにアスファルトを叩く。

会社帰りの男。

学生らしい男。

スーツの上からでも身体の厚みが分かる男。

誰かの夫かもしれない男。

誰かの恋人かもしれない男。

わたしには関係のない人たち。

そう思っているのに、視界の端が勝手に拾ってしまう。

広い背中。

低い声。

シャツの袖から覗く腕。

ポケットに片手を突っ込んだまま歩く、少し雑な足取り。

そのどれかに、わたしの中の何かが小さく反応する。

いけない。

そう思った瞬間、バッグの中のスマホが震えた。

彼からだった。

『仕事終わった？ 寒いから気をつけて帰ってね』

画面に浮かんだ文字は、いつものように優しかった。それだけで、胸の奥が少しだけ痛む。

わたしは立ち止まり、短く返信を打った。

『うん。今から帰る』

嘘ではなかった。

本当に、帰るつもりだった。

送信ボタンを押して、スマホをバッグに戻す。

その時、駅前の雑踏の向こうで、またひとりの男が目に入った。

ポールに背を預け、退屈そうにスマホを眺めている男だった。

周囲の明かりから少し外れた場所に立っていて、顔には濃い影が落ちていた。

背が高い。

手が大きい。

そして、どこか乱暴そうだった。

見てはいけない。

そう思ったのに、わたしの足はほんの少しだけ遅くなった。

今日は、まっすぐ帰るつもりだった。

本当に、そのつもりだった。

彼に不満があるわけじゃない。

むしろ、ない。

探そうとしても、たぶん見つからない。

優しいし、よく気がつく。

わたしの話を途中で遮らない。

寒い日は温かい飲み物を買ってくれるし、歩く速さも自然に合わせしてくれる。

人混みでは、わたしがはぐれないように、さりげなく手を差し出してくれる。

大切にされている。

それは分かっている。

分かっているから、余計にたちが悪い。

彼という夜は穏やかだ。

部屋の明かりはやわらかくて、ソファの沈み具合も、彼の声の低さも、全部が安心できる。

わたしが少し黙ると、彼はすぐに気づいてくれる。

「疲れた？」

そう聞いて、無理に理由を探ろうとはしない。
ただ隣にいてくれる。

そんな人、他にいないと思う。

わたしには、もったいないくらいの人だと思う。

なのに。

駅前を歩いていると、知らない男の背中を目で追ってしまふ。
商店街の光の下、通りすぎるだけの男の手を見てしまふ。
低い声が耳に入ると、少しだけ息が浅くなる。

彼とは違ふ。

彼なら絶対にしないような目つき。

彼なら絶対に使わないような乱暴な言葉。

彼なら、わたしに向けないはずの雑な手つき。

そんなものを、想像してしまう。

最低だ、と思う。

でも、その言葉はいつも少し遅れてやってくる。

先に来るのは、罪悪感ではない。

もっと身体の奥に近い、言葉にしにくい熱のようなものだ。

彼が嫌いなわけじゃない。

彼に飽きたわけでもない。

彼に傷つけられたいわけでもない。

ただ、ときどき思ってしまう。

彼に大事にされているわたしとは別のわたしが、どこかにいる気がする。

名前を呼ばなくてもいい。
優しくされなくてもいい。

わたしがどんな人間かなんて知らないまま、ただ女として見られる夜。

そんな夜に、自分がどんな顔をするのか知りたくなる。

そう思った瞬間、胸の奥がひやりとした。

おかしい。

やっぱり、どこかおかしい。

恋人がいるのに。

あんなに優しい人がいるのに。

帰れば、きっといつもの声で迎えてくれるのに。

それなのにわたしは、駅前の雑踏の中で、知らない男の大きな手を見ている。

その手が自分に伸びてくるところを、ほんの一瞬、期待している。

彼からのメッセージは、まだバッグの中で光っている。

『今から帰る』

さっき自分で送ったその言葉を思い出す。

嘘ではない。

嘘ではないはずだった。

けれど、わたしの足はまだ、家の方へ向かっていなかった。

視線だけが、駅前の人混みの中にいる知らない男を探していた。

そしてそのことを、わたし自身がいちばんよく分かっていた。

駅前の人混みの中で、その男だけが少し浮いて見えた。

改札前の柱にもたれ、片手でスマホを眺めている。

誰かを待っているのか、それともただ暇を潰しているだけなのか分からない。

顔を上げるでもなく、通り過ぎる人の流れにも興味がなさそうだった。

背が高い。

まず、そう思った。

次に見たのは手だった。

スマホを持つ指が長く、手のひらが大きい。

爪先まで綺麗に整っているわけではない。

彼の手とは違う。

丁寧に触れるための手ではなく、掴むための手に見えた。

そんなことを考えた自分に、少しだけぞっとする。

彼なら、わたしの手を取る時も力加減を間違えない。

寒い夜には、指先が冷えていないか気にしてくれる。

人混みで肩がぶつかれば、「大丈夫？」と顔を覗き込んでくれる。

あの男は、きっとそんなことを言わない。

ぶつかったら、謝る前にこちらを見る。

面倒くさそうに眉を動かして、何も言わずに通り過ぎるかもしれない。

優しく笑わない。

気を遣わない。

わたしの歩幅に合わせたりもしない。

それなのに、わたしの視線はその手から離れなかった。

あの大きな手で掴まれたら、どうなるのだろう。

そんな考えが、ふいに頭をよぎる。

手首。

肩。

腰。

逃げようとしても、簡単に引き戻されてしまうのだろうか。

ぞくりとした。

怖い、と思った。

たぶん本当に怖い。

知らない男だ。

名前も知らない。

声も知らない。

どんな人間なのかも分からない。

それなのに、その分からなさが、わたしの中のどこかを静かに熱くしていく。

彼のことを思い出す。

彼なら、絶対にこんな目でわたしを見ない。

わたしを驚かせるような触れ方もしない。

わたしが少しでも困った顔をすれば、すぐに手を止めてくれる。

その優しさに、何度も救われてきた。

なのに今、わたしはその優しさとは正反対のものを想像している。

乱暴に掴まれること。

逃げ場を塞がれること。

名前も呼ばれず、ただ女として見られること。

最低だ。

そう思ったのに、足は止まったままだった。

男がスマホから顔を上げた。

ほんの一瞬、目が合った気がした。

胸の奥が、嫌なほど大きく鳴る。

すぐに視線を逸らせばよかった。

何事もなかったように、改札へ向かえばよかった。

彼のメッセージにもう一度返事をして、いつも通りの夜へ戻ればよかった。

でも、わたしは動けなかった。

男はわたしをじっと見ていた。

優しさのない目だった。

探るような、値踏みするような、どこか退屈そうな目。

その目つきに、わたしは少しだけ怯えた。

そして、怯えた自分が逃げ出さないことに、もっと怯えた。

バッグの中で、スマホがまた震えた気がした。
彼かもしれない。

でも、確かめなかった。

わたしはまだ、駅前の明かりの下に立っている。
まっすぐ帰るはずだった夜の途中で、知らない男の大きな手を見
ている。

その手が自分に伸びてくるところを、想像してしまっている。

すぐに視線を外せばよかった。

目が合った。

それだけのことだ。

街を歩いていれば、知らない誰かと目が合うことくらいある。

何も起きていない。

何も始まっていない。

なのに、わたしは視線を逸らせなかった。

男も、スマホを見るのをやめていた。

駅前の柱にもたれたまま、少しだけ顎を上げ、こちらを見ている。

怪訝そうな顔だった。

なんだ、この女。

そう思っているのが、表情だけで分かった。

普通なら、そこで終わる。

気まづくなって目を逸らす。

わたしは足早に改札へ向かう。

彼に「今から帰るね」ともう一度メッセージを送る。
いつもの夜に戻る。

それでよかった。

それなのに、わたしの足は反対に動いた。

一歩。

もう一歩。

人の波を避けながら、わたしは男の方へ歩いていく。

自分でも何をしているのか分からなかった。

いや、分からないふりをしているだけだった。

男との距離が近づく。

煙草の匂いがした。

安い整髪料の匂いも、少しだけ混じっている。
彼からは絶対にしない匂いだった。

男は柱から背中を離さない。

逃げる気も、迎える気もないような顔で、近づいてくるわたしを
見ている。

「……何？」

低い声だった。

思っていたよりも、ずっと近くで聞こえた。
その一言だけで、胸の奥が小さく跳ねる。

何、と聞かれても困る。
わたしにも答えはない。

声をかける理由なんてない。
知り合いでもない。

道を聞きたいわけでもない。

落とし物を拾ってもらったわけでもない。

ただ、目が合った。

ただ、立ち止まった。

ただ、わたしの中で何かが傾いた。

「少し……歩きませんか」

自分の声が、ひどく他人のものみたいに聞こえた。

男は眉を動かした。

驚いたような、面白がっているような顔だった。

「俺と？」

「はい」

「知り合いでもないのに？」

そこでやめればよかった。

冗談です、と笑えばよかった。

すみません、と頭を下げて逃げればよかった。

でも、わたしは笑わなかった。

「少しだけ」

そう言った瞬間、男の目つきが変わった。

わたしを見ていた目が、わたしの奥にあるものを探る目になる。

ただの偶然ではないと、男も気づいたのだと思う。

しばらく沈黙が落ちた。

駅前の雑踏は変わらず騒がしい。

改札から人が流れ、バス停には列ができ、商店街の明かりはいつも通り眩しい。

その中で、わたしと男だけが、少しずつ別の場所へずれていくようだった。

男はスマホをポケットにしまった。

「いいけど」

それだけ言って、柱から身体を起こす。

わたしは頷いた。

歩き出したのは、わたしが先だった。

駅前の明るさを抜け、商店街の端へ向かう。

シャッターの下りた店が増えていく。

人の声が少しずつ薄くなる。

代わりに、室外機の低い音や、遠くを走る車の音が耳に残る。

男は半歩後ろを歩いていた。

近すぎない。

遠すぎない。

それがかえって怖かった。

振り返れば、まだ戻れる。

このまま駅前引き返せる。

知らない男に話しかけてしまっただけの、少し変な夜で終わらせられる。

そう思った時、前方に細い路地が見えた。

商店街の明かりから外れた、暗い裏通りだった。

店の裏口が並び、壁際には黒いゴミ袋が積まれている。湿った空気が流れてきて、どこか生臭い。

人が通る場所ではない。

少なくとも、普通の帰り道ではない。

わたしは、その路地の入口で足を止めた。

背後の男も止まる。

「……そこ？」

男の声には、もうさっきまでの怪訝さはなかった。
代わりに、何かを察したような低い響きがあった。

わたしは振り返らなかった。
振り返ったら、きっと顔に出してしまうと思った。

怖い。

本当に怖い。

でも、怖いだけなら、ここには立っていない。

「この奥……行きませんか」

言ってしまった。

言葉が夜の空気に落ちた瞬間、もう引き返せない気がした。

男は少しの間、黙っていた。

それから、喉の奥で短く笑った。

「へえ」

その声が、背中に近づく。

「あんた、そういう感じなんだ」

責めるでもなく、優しくするでもなく、ただ面白がるような声だった。

わたしは何も答えなかった。
答えられなかった。

ただ、暗い路地の奥へ向けて、一歩踏み出した。

駅前の光が、背中から少しずつ遠ざかっていく。

彼のいる日常も、暖かい部屋も、甘いココアも、まだ戻れるはずの夜も。

最後までお読みいただき、
ありがとうございました。



この物語が、
ほんの少しでも心に残れば
嬉しいです。



著者

Pon | 残響書庫



— 作品や日々のことはこちら —



note (作品・文章)
note.com/sorasora1515

小説やエッセイなど、
作品をまとめています。



Threads (執筆中のこと)
[@pon222115](https://www.threads.net/@pon222115)

執筆の裏側や日々のことを
気ままに綴っています。



X (短い文章・お知らせ)
[@sorasora5755](https://twitter.com/sorasora5755)

短い文章やお知らせを
中心に投稿しています。



Substack (長編・その他)
substack.com/@ponmemo

長編や読み物を中心に
公開しています。



応援していただけることが、何よりの励みになります。
またどこかで、あなたに物語を届けられますように。

Thank you!

© Pon | 残響書庫

本作品の無断転載・複製・アップロード・公開を禁じます。
すべての権利は著者に帰属します。